
いつものこと

丹羽凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつものこと

【Nコード】
N2163T

【作者名】
丹羽凜

【あらすじ】
二人がただ話しているだけです。

「信じる者は救われるって言うでしょ。ならば、信じない者は救われないってことになるじゃない。ということとはつまり、すべてのものはひどく人間的なものじゃないかしら？神であれ、人であれ、物であれ、なんであれ信じられなければ救わないということになるでしょ？ならばホントにそんなものが救ってくれるのかしら？遠藤君」
坂口さんは早口で僕に問いかける。

「そうですね。確かにそういわれてみるとそんな気がしますね」
僕がそう答えるやいなや

「つまらないわ。そんな簡単に私の意見をのんじゃうなんて。そんな受け答えなら、家にいるキュウちゃんと喋っていたほうがまだましだわ」

口をとがらせていう。キュウちゃんとは、坂口さんが家で飼っている九官鳥のことであり、どんな話にも、へえ、おもしろいね、もっともって、などと多彩にリアクションを返してくれるのだ。一度だけ家に行ってしゃべってみたのだが、つまないと連呼をされ拳句の果てには、アンタナンカキライとイントネーションのおかしな口調で言われてしまった。坂口さんはそんな言葉は教えていないはずだし、そんなことを言われた覚えもないという。たぶん目の前にあったテレビのせいだろう。そう思いたい。さすがに、九官鳥以下と称されるのは癪なためちゃんとした意見を言う。

「全知全能である神がすべてを救わず、選り好みをして救うのはやっぱ人間っぽいですよ。神様なら全部救って然るべきじゃないんですか？人や物に対してそれを言うのはお門違いな気もするけど…」

「…」
「ちゃんと聞いているじゃない。」

坂口さんは満足そうに言う。続けてしゃべる。

「じゃあ、遠藤君。あなたはわたしの意見に賛成なのね」

「ええまあ」

「ちなみに私はどっちでもいいのだけれども」

「えっ？あなたの意見じゃ……」

言葉を続けようとするが、それを遮って坂口さんはしゃべりだす。

「じゃあ、神について語りましょう。神様は全知全能であるといったわね。じゃあいったい全知全能とはなに？」

そんな質問にすぐに答えられるわけもない。僕はじっくりと考える。適当なことを言えば九官鳥とまた比較されてしまう。全知全能、全知全能、全知全能……。頭の中で反芻するが思いつかない。

「キュウちゃんのようにぱっと答えてくれないかしら。ない頭で考えたって仕方ないじゃない」

どうやらどうしたって九官鳥と比べられるようだ。しかも、今日はやけに毒舌だ。何かいいことでもあったのだろう。しょうがないので、一番初めに思ったことを言う。

「全部知ってって、全部の能力を持ってる」

「全部って？」

「うーんと……。人間が知ることができないことや、することができないこと。たとえば、未来とか宇宙の始まりだとか」

今度はあまり間を開けずに言う。これで、九官鳥のほうがいいとは言われないはずだ。

「キュウちゃんですらそんなことぐらい言えるのに。あなたの頭は鳥並みですね」

どうやら何を言っても今日の僕はキュウちゃん以下らしい。僕は何ともなしに聞いているが、心の中はぼろぼろだ。心が優しさつてのを渴望している。そんな僕の心を知っているであろうが、坂口さんは話を続ける。

「じゃあ、全部知っていたら、あなたは誰を助ける？」

「僕？そりゃ全部助けるよ。神様だったら」

「全部って？」

「そりゃ、人も動物も植物もとりのあえず全部だよ」

「人さらいも、人殺しも、人食いも？」

その言葉で僕は詰まる。坂口さんは困る僕を見て微笑んでる。女性であるならそんな言葉は使わないでほしいと思うこのごろである。純真無垢な少女の声を持つ坂口さんの腹の中は結構黒い。なんていうか一言でいえばDSってやつだ。人がに精神的に嫌がることを好む。楽しむ。僕は血を見ただけでも失神してしまいそうになることを知りながらも、怪我をしたら真っ先に見せてくる。嫌がらせの数々は話しても三日三晩じゃ話しきれないほどだ。

「じゃあ、何かを救えば、何かが救われないとしたら？ 簡単な例だと、ある動物を救ったら、その動物がほかの動物を絶滅させたとか」何も答えなさそうな僕を見て、坂口さんは質問を変えた。相変わらず顔は笑ってる。

「そうだとしたら、救わないことが救いなんじゃないかな」

矛盾したことを言っている気もするがとりあえず言葉にした。

「神様は何も救わない。それが唯一の救いだとは思わないかい？ 遠藤君」

そう言いながら僕の手を握る。

「そうだね」

そう言いながら僕はちよつと強めに手を握り返す。いつものお返しに。坂口さんの目が僕をにらむ。

ただそんな彼女が僕は好きだ。

（後書き）

適当に書いたんであれですね。自分もよくわかりません。コメントもらえるならうれしいです。お勧めの小説教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2163t/>

いつものこと

2011年10月8日23時14分発行